

## SRID 会員紹介： 高瀬国雄さん

### 「農村開発とコーラスのハーモニーを生きる」



6月15日、会員紹介担当の村上、藤村委員は、霞が関ビル35階の東海クラブにおいて、昼食をしながら高瀬さんにインタビューを行いました。高瀬さんは、とても几帳面な方で、私達が希望した若き日の写真を多数持参して、説明されました。「農業開発」の夢を追うロマンチストの高瀬さんは、いつも心のハーモニーを忘れない「国際開発プロフェッショナル」です。

フィリピン、マヨン火山  
を背景に、1969年3月

### 「戦後、19才のひもじさが仕事の原動力だった」

と語る高瀬さん。広島県江田島の海軍兵学校75期生で終戦を迎え、広島原爆の跡を通過して郷里に帰ってからというもの、日々の空腹は、耐えがたいものがあった。お国のためにと海軍兵学校に入学した身ではあったが、終戦後の空腹は、「日本の食糧を満たすことこそが、お国のためになるのだ」という信念を生み、京都大学農学部へ進学。1949年卒業と共に、農林省（現在の農林水産省）に入省。以後、愛知用水公団（現在の独立法人水資源機構）、アジア開発銀行（ADB）、海外経済協力基金（OECF、現在の国際協力機構）において、ひたすら食糧増産、とりわけ「米増産」に情熱を持って取り組んだ。これらの経験をもって、国際開発センター（IDCJ）理事に迎えられ、世界中の食糧問題に取り組んで来たのが、農業開発プロフェッショナルの高瀬さんである。現在、85才。今も、情熱を持ってアフリカの農業開発、「虹色革命」の夢を追うロマンチストの毎日だ。

### 「食糧の確保と国の復興のために働くことの両立を目指して」

1949年、農林省入省直後に配属された岩手県山王海ダム建設現場では、3年間、高さ37.4mの東洋一のアース・ダム建設の難事業に専念した。3年後、3000町歩の水田から1万トンのコメ増産が農村貧困層を潤したことは忘れられない喜びだった。この時、岩手県出身の作家、石川啄木や宮沢賢治の作品に触れ、二人の作家の世界観に深く感銘を受けた。これが現場から世界の貧困問題を考えるきっかけになったという。この成果によって、「今度は、日本全国の灌漑を推進する」ためにと、農林省本省に戻る。



輝かしき社会へのスタート

岩手県山王海ダムの建設現場、1949年5月

### 「コーラスで職場も家庭もハーモニーに」

農林水産省、本省勤務中は全国的視野の農政の傍ら、労働組合書記長や農林水産省合唱団の活動に励み、テノールとして大活躍。農林水産省合唱団団長として、全日本合唱コンクールに出場して優勝4回を飾るなど、200名の男女混声ハーモニーを大いに楽しんだ。愛知用水公団に異動してからも、コーラス活動を継続。1956年12月から1年4ヶ月間、シカゴに駐在した時もシカゴのキリスト教会の合唱団に参加した。日本と戦争をしたアメリカ人ではあったが、人々はおおらかで、友達もできた。この時、英語学校に3カ月通い、毎日の仕事を通じて英会話を習得。短期間ではあったが、アメリカの社会及び文化との接点を通じて、仕事と趣味のハーモニー、所謂ワーク・ライフ・バランスを考えて生活したことが、異文化交流の原点となった。このコーラス人生は、その後のADB勤務中にも更に継続された。



伏見(京都)、すずかけ(名古屋)、農林水産省(東京) 3合唱団の蓬莱山合同キャンプ、1966年8月(一列中央が高瀬さん)

### 「アメリカ在任中は気候、地質の異なる東部・中部・西部など各州を視察して開眼」

愛知用水総合開発事業は、世界銀行が日本政府への融資に合意して事業計画が本格化。同事業は長野県木曾川に高さ81メートルの牧尾ダムを造り、33万町歩の灌漑、一億キロワットの発電設備の設立、工業・飲料用水事業を含む大事業。シカゴ駐在時代に、テキサス、アリゾナ、カリフォルニア、オレゴンなど各州の種々のダムを視察して大いに開眼。これらの経験とノウハウの蓄積が愛知用水とその後の仕事に十分に活かされた。

### 「アジアの緑の革命を実現するために尽力」

1967年に、設立直後のアジア開発銀行勤務のため、フィリピン・マニラに赴任。小学校6年、4年、1年の男児3人をフィリピンの小学校に入れた。米の増産を通じて、食糧自給達成を目指す、「アジアの緑の革命」を実現するために尽力。アジア各国で、農業用灌漑システムの整備を実現するための働きかけを实践。ADBは、多国籍からなる職員で構成される正に異文化のハーモニーが重要であった。英語はシカゴ駐在時代の実践的学習から身につけていたので、ADBの中では不自由なく、仕事ができる。

### 「海外経済協力基金（OECF）に調査開発部を設立」

ADB から帰国すると、大来先生に依頼されて OECF に勤務することになり、日本政府各省から出向した 8 人の専門家からなる調査開発部を立ち上げた。当時の OECF は、プロジェクトの形成とフィージビリティ・スタディの取り組みが弱体で、ADB の経験を基に、その能力強化に努力した。ADB には、二度目の勤務をすることになり、日米欧の専門家の協働などハーモニーの重要性をアジア・レベルで実践。二度目の ADB では農村開発局長に昇進し、農地改革や灌漑水資源開発の強化に務め、OECF では ODA 予算増加に尽力するなど、ADB と OECF 通算 20 年間に亘る勤務を通じて、緑の革命をより大きな成功に導くことができた。

### 「アフリカの虹色革命を推進」

ADB 退職後の 1986 年からは IDCJ の理事として勤務。世界 71 カ国の農業開発と食糧問題の解決に取り組んできた。現在は NGO を通じて、残されたアフリカの農業開発に主眼を置き、米だけでなく、メイズ、イモ、果物、野菜、牧畜、魚類、の 7 種類からなる各種の食糧全般を増産するための「虹色革命」実現を追及している。



インドネシア、クバン島にて、  
国際開発センター調査団セミナー、  
1998 年 1 月

85 才になった 2011 年 3 月 11 日に、世界最悪の東日本大震災が発生。この災いを転じて「虹色の革命」につなげる宇宙の英知を、心から念じてやまない日々を、高瀬さんは生きている。